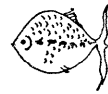


MUSIC MAKING

—創造活動の一環として—



はしがき

私たちの幼稚園の年間目標の中に「創造的な生活態度を身につけるようにする」という項目があり、その中に、更に小目標として「自分で考えて行動する」「喜んで人と協力する」「身の回りのことに興味を持つ」「楽しんで表現する」その他、いくつかの項目がある。この目標を達するための創造活動の一環として、音楽リズムの面で、MUSIC MAKINGを試みた。これは東洋英和短期大学保育科の芝助教教授の研究によるMUSIC MAKING（日本保育学会第23回、24回発表）の一部の実践でもある。

この実践は、昭和47年度の五歳児、41名（二クラス）に試みたものである。二クラスに分れているが、子どもたちの日常の活動は、ほとんど一緒であり、また教師も協力し合い、クラスのわくを取り除き、活動している。教師は遊びの生活においては、子どもたちの経験と活動を豊かにするような環境を整えるように努め、次のような特別活動を計画した。

- (1)、幼稚園の中の四季の変化を五感で感じる
- (2)、遠足・散歩・芋ほり等の園外保育に出かける
- (3)、キャンプ生活（二泊三日）を経験する
- (4)、見学に行く（パン屋、飛行場、動物園、消防署）

藤井 清子
 赤羽 まり
 丹羽 輝子

(5)、短大生の楽器演奏を聞く

(a) 五月 音楽描写 (花火、風鈴、星のまたたき、山の朝、

足音、雨)

(b)十一月 自作の楽器による、ハイドンの「TOY SYM

PHONY」の演奏

(c) 二月 「フランシスの家出」のミュージカル

(6)、生演奏を聞く(ピアノ・サクソホン・クラリネット)

(7)、自分たちの作った音を発表する

これらの活動は、絵画製作、身体的リズム活動、ごっこ遊び等で表現され、それらの中の一つとして、MUSIC MAKINGも試みた。そしてこれらのすべての活動は、他の遊びと平行して、行われていった。

二

子どもたちはどのように音を発見していったか。

一年間を通じて、大きく三段階に分けられる。

第一段階 五月―七月

① 既成の楽器を十分楽しむ

● 部屋に楽器を出す(タンバリン、鈴、カスターネット、トライアングル)

子どもたちは自由に音を出し、音を試す

● ゲームに使う(番犬ゲーム、音あてゲーム、打った数だけ手をたたく)

● ピアノのマーチに合わせて、自由に音を出す(大太鼓も加わる)

子どもたちは、この段階で音の強弱を意識し、曲の感じ、音の組合せを考えるようになる。

② 楽器以外に音がでることを発見する

五月、短大生による音楽描写を聞いた後、一人の女兒が、「知恵の輪を振るときれいな音がする」と教師の所に持って来たことがきっかけとなる。教師は何の音か聞くと、「風の音」と言う答がかえって来た。帰る前にクラスで音を紹介、全員目をとじて、音を聞く。「風の音がする」「虫の音だ」教師は子どもたちに、音さがしについて話をし、活動が始まる。帰る前に、その日に見つけた音をお互いに紹介し合う。

マジックの入った箱を片づける時に揺れて音を発見した子ども、部屋にある物を、片端から振って音を発見した子ども、とさまざまである。

③ 容器の中味により音が違うことを発見する(おはじき、ブロック・マジック容器とふた、豆、木の実)

④ 容器の質、種類により音が違うことを発見する（罐、ビン、プラスチックのケース、紙の箱）

⑤ できた音に名前をつける

マジックの入った箱（大きな馬）知恵の輪（風の音、虫の音）特に馬の音を好んでいた。この時期は、まだ偶然でできた音である。

⑥ 劇場遊びの中で音を紹介する

「これは〇〇の音です」

第一段階では、子どもたち自身で発見することを大切にし、音を全体で紹介するだけにする。音はすべて、保育室にある玩具、教材、廃品で作った物である。

第二段階 九月―十二月

① 夏休み中に経験した音をさがす

休みに音をさがすことになっていたが、ほとんどの子どもが忘れていた。経験したことを話し合ううちに、キャンプの時や、各々が海や山で過ごした生活で聞いた音を思い出す。

② 振る速度を変えたり、かきまぜることにより音が違うことを発見する

第一段階では振るだけであった。

③ 物を打ち合わせて音が出ることを発見する

竹筒を「何かに使えないかしら」と子どもたちに見せると、打ち合せたり、床をたたいて、「馬の音」と答える。

④ 目的を持って音を作る

「虫の音を作ろう」「波の音を作ろう」と音の選択をするようになる。

「これは大きな波」「これは小さな波」

⑤ 周囲の小さな音に気付き、積極的に捜すようになる（葉の揺れる音、水道の水の音、雨の音、貝を耳につけると聞える音、

枯れ葉を踏む音）ほか

気がつかなかった音が自分たちのまわりに、たくさんあることに驚くと同時に、友だちと競争しながらさがすことを楽しみ、小さな音に注意を向けはじめて、発見の喜びを味わう。

⑥ 鋼鉄製の遊具（ジャングルジム、ブランコ、たいこ橋ほか）

をたたいて耳をつけると、音が響くことを発見する

十一月に、短大生によるTOY SYMPHONYの演奏を聞き、その後、楽器を借りて、一緒に演奏に参加する。MUSICは刺激をうけて、また多勢が参加するようになった。

第三段階 一月―三月

① 既成の楽器を充分楽しむ

- ・ホールに楽器を置く(タンバリン、鈴、カスターネット、トライアングル、スティック、大太鼓、水笛、マラカス、ボンゴ、ウッドブロック、シンバル、水の入ったコップ)
- ・参加したい子どもが自由に集まる。今まではピアノの回りにバラバラに集まっていたが、楽器の種類によって集まる場所を決める

② 動物の動き、感じを音で表現する

自分たちで楽器を選ぶ(ペンギン、象、水鳥、うさぎ)

③ 指揮の意味がわかる

ある男児の指揮で、子どもたちは、勝手に演奏してはいけな
いこと、楽しみながら身体全体で音を表現することを知る。

- ・おじぎをする

- ・両手を前に出し、他の子どもに注意をうながす

- ・タクトをあげ、ピアノに合図する

- ・休みのパートは、手と言葉を使い止める

- ・休みのパートを参加させる合図をする

- ・両手の他に、身体全体を使い指揮をする

④ 一年間のMUSIC MAKINGの活動のまとめとして、卒業式に発表する

一年間、常に全員が参加したのではなく、刺激があると、多勢になり、しばらくするとまた人数が減るということの繰り返しであった。消極的な子どもに対して、教師は他の子ども達の演奏を聞かせたり、楽しそうなようすを見せる等の刺激を与え、興味を起こさせるようにした。

三

まとめについて

子どもたちを五つのグループに分け、幼稚園生活の中で、自分たちの経験した音を作ることにする。

方法①今まで作った音の中から選ぶ

②幼稚園で考え、作る

③家で考え、作って持って来る

過程①作りたい音を考える

②音作り、音集め、音の選択、音を聞き合う

③音色によって、順番を決める

④速さ、リズムを考える

期間 二月二十三日―三月十四日

[1]のグループ 乗物の音(汽車・飛行機)

[2]のグループ キャンプの音(ブランコ・花火・かっこう・きつ)

[まとめの時に作った音]

グループ名	人数	作った音	素 材	動 作	個数
乗物	8	自動車 汽笛 エンジン	水笛 (水なし)	吹く	1
			ビン (ファンタ・1.8ℓの酒瓶・サイダー)	"	3
			竹筒2本 アイスクリームのケース (プラスチック) 2個	打ち合せる	1 1
		飛行機 エンジン	ボール箱に実をいれたもの	振る	1
			ブランディーグラス (教師) マラカス	擦る 振る	4 6
			卵ケースに米を入れたもの プラスチックの容器に米を入れたもの	振る	1 1
蛙	1		赤貝 2個	擦る	1
キャンプ	8	かっこう きつつき 小鳥 ブランコ 花火	ウッドブロック	打つ	2
			クルミ2個 クラベス	"	3
			水笛	吹く	3
			スプーンとナイフ	擦る	1
			積木 2個	打つ	1
			罐にビーズを入れたもの 2個 箱の中にあずきを入れたもの	振る "	1 1
夏	8	波 雷	大きな箱にあずきを入れたもの	流す	1
			大太鼓	打つ	1
			大きな罐にクルミを入れたもの	振る	1
		雨 小降り 大降り	でんでん太鼓	振る	1
			プリン容器 } あずきを入れたもの マリーナの "	"	1 1
		せみ 風鈴	カラスプレーの容器 風鈴	" "	1 1
秋	8	枯れ葉を踏み音	ビニールの袋の中に砂、枯れ葉を入れる	振る	2
			虫 くつわ虫	ビンの中に貝を入れたもの ババロアの容器にマジックのふたを入れたもの	" "
		馬追い	ブロックと凹凸の板	擦る	2
			ハイミーの容器にビールのふたを入れたもの	振る	1
		鈴虫	トライアングル		1
動物	8	象	大太鼓	打つ	1
			シンバル	"	1
			鈴	振る	1
			ままごとの木製茶碗 2個	打ち合せる	3
			箱の中に小石を入れたもの	振る	1
		馬	箱の中にブロックを入れたもの	"	1
			卵ケースにおはじきを入れたもの	"	1
			エルビーの容器にあずきを入れたもの	"	1
			トライアングル	打つ	3
			鈴	振る	2
水鳥(白鳥)	プラスチックのうちわ 2個	打ち合せる	1		

歌	作った音	リズム
春が来る は、は、春だよ プランコ	かえる 汽車 プランコ 小鳥 花火 波 雷 雨 風鈴 足音（枯葉をふむ音） 鈴虫 馬追い（スイッチョ） くつわむし（ガチャガチャ） 象 馬 水鳥（白鳥） 飛行機	かえる 山のぼり 泳ぎ 虫さがし 水鳥 飛行機

つき

③のグループ 夏の音（海・雨・雷・せみ）

④のグループ 秋の音（虫・枯れ葉を踏む音）

⑤のグループ 動物（象・水鳥・馬）

この活動は、他のごっこ遊び等と平行して、グループごとに行った。

活動例と教師のかかわり方

① 汽車の音の場合、子どもたちの作った音は「箱の中に実を入れた物」「竹筒」「アイスクリームのケース」「水なし水笛」だけであった。これらの音を聞いた後、足りない音はないか話し合うと、蒸気の音がないことに気付く。教師は、子どもが「車のブレイキの音」と言って持って来た、ゴム風船と、ピンを出し、「何か音が出ないかしら」と持ちかける。子どもたちはいろいろ試した結果、ピンを吹いて蒸気の音を作り、ゴム風船をブレイキに使うことに決める。蒸気の音は、初め一本吹き、順々に増す。また、汽車の音だけでなく、馬の音の場合も同様に、速度の変化、音の大きさの変化も考える。

② ⑤のグループの音は、音そのものではなく、動物の動きを表現しているため、自分でその物の生態を見た物、知った物、身体的リズム活動をした物を選ぶ。（象・馬・水鳥）

水鳥の羽ばたく音に、グループの一人は、プラスチックのうちわを選ぶ。また他の楽器を使っている子どもも、自分たちも飛んでいるように、身体を動かしながら演奏する。

③ 教師の助言が大きな影響を与えるため「何かになるかしら」「どんな音が出るかしら」「違う方法はないかしら」「とてもきれいな音ね」等、あくまでも子どもたちが自分で考える意欲を増し、発見の喜びを体験するように、素材の提供や、注意を促すことで活動が発展する助言だけに止める。

④ 全部のグループの音ができると、お互いの音を聞いてみる。

「春の音がない」と言う子どもが出て来る。この年は、幼稚園の池に特にたくさんのかえるがいて、翌日、赤貝をこすり、「かえるの声」と言い、音を作って来た子どもがいた。

教師の語りを加え、幼稚園での体験を、楽器演奏、歌、身体的リズム活動でつづる。したがってピアノの影響は大きかった。

ピアノの役割

① 教師は、子どもたちが楽器を始めるとピアノを弾く。

② 子どもは成長段階に合わせて、単純なものから、複雑なものへと変化させる。

③ 子どもは要求により曲を選ぶこともあるが、子どもたちのなじみやすいマーチが多い。

④ 第一段階では、ピアノに子どもたちが自分の楽器を合わせていたが、第三段階では、子どもは選ぶ楽器や、曲の感じを子どもから聞き、ピアノがそれらの楽器に合わせて行く。

結び

MUSIC MAKING 結びの活動は、子どもたちが、自分で考え、見聞きする生活を基盤とした年間の生活を発展させ、まとめて行くうえで大きな影響があった。

① 集団の中で、消極的な子どもを含めて、自分で音を作り、のびのびと創造的な表現をするようになった。また、自分で考え、見、聞き、試し、捜す生活の喜びを知り、これらの行動を通して、積極的に物にかかわる自信をつけていった。

② 個性を伸ばすと同時に、集団とのかかわり方を学んでいった。(協力することの大切さを知り、思いやりの心を養った)

③ 小さな音をさがしたり、音を作り出すと言う努力は、子どもたちがそれまで気がつかなかった、物に対する愛情、注意力を養う助けになった。

これらのことを通して、教師同志の協力、教師自身の柔軟な思想が大切であることと、結果よりむしろ、そこまでの過程を重視することの大切さを再確認した。

(東洋英和幼稚園)